

# 第1回 多治見市総合計画市民委員会 議事要旨

期 日：平成23年5月17日(火)

時 間：18:00～21:00

場 所：市役所4階会議室

出席者：別表のとおり

## 1 市長挨拶

今回の総合計画策定の主眼は「子どもの目、大人の目、女性の目、男性の目」。

大学進学や大企業への就職のためには多治見市を離れる必要がある。しかし、多治見市から出る必要がなくなる、または大都市から多治見市へ帰ってくるためには多治見をどうすればよいかを考えるため、小学校6年生・中学校3年生など、子ども自身の意見を総合計画に包含させる。

多治見市では、総合計画を策定することではなく、総合計画に基づき政策を実行・実現することが重要であると考えている。そのためには分かりやすくすること、みんなで考えることで一緒に行動しようと考えられるようにすることが必要である。

二期目の市長としてのキーワードは、まず人それぞれが元気になること。個人が元気にならないければ、まちが元気になることはない。もう一つは「人財育成」を最優先すること。一般的には「人材」と表記されるが、多治見市では「人財」と表記する。

市長の任期にあわせた総合計画を策定することで、総合計画に基づいた政策を実行していく。つまり、多治見市の予算630億円の使途に優先順位をつけていただくこととなる。男女、老・壮・青のバランスをとった計画策定にご協力いただきたい。

## 2 委員自己紹介

## 3 会長・副会長の選任

中津道憲委員を会長に、牛田拓造委員を副会長に選任。

## 4 事務局からの説明

- (1) 第6次総合計画の概要
- (2) 市民委員会の役割と今後のスケジュール
- (3) 前期総括と討議課題集
- (4) 基本構想の骨子

## 5 意見交換（今の多治見に「加味してほしい点」、「問題点」について）

- ・多治見市の人口は、笠原町との合併を差し引いても減少傾向にある。第6次総合計画では、「人も、まちも元気に」をキーワードとしているのだから、人口を増やすという発想もあるとよいのではないか。
- ・将来の高齢化率増加を食い止めるには、企業誘致や住居としての流入促進等、いろいろな考え方があがる。
- ・人口減少傾向にある中、多治見市をもっと元気にするには、人が集まってくるような場所にする必要がある。観光資源を活用して魅力を高めれば、市外からの流入を呼び込めるのではないか。

- ・商店街等の商業者が嘆くのは後継者が不在であること。市外への流出を食い止めるには、市内で商売が成り立つことが前提となる。駅周辺に人が行きかうよう、場所だけでなく中身を充実することが不可欠である。
- ・障がい者や高齢者からは、弱い立場になっても人の役に立ちたい、とよくお聞きする。団塊の世代が社会とつながって役に立っていると実感を得られるようになることは、一番の元気の源になるのではないか。
- ・若者は市内に働く場がないから市外に出るのであり、住みやすいまちにするには働く場を先につくらなければいけない。
- ・いろいろなことで悩んでいる母親は多く、相談できないことに疲れている。市が相談できるシステムを稼働できるのであれば、よい市になるのではないか。母親が元気なまちは、子どもも元気になると思う。
- ・親は子どもが障がいを持っていると、表に出したがるなくなる。また、相談の場の敷居も高くなる。悩んでいる母親には一歩踏み出す勇気が必要であり、その勇気を持たせることが元気を持たせる要素ではないか。
- ・まちが元気であるには、若者が元気でなければならない。地元作家の器で料理を提供する飲食店が商店街にあるが、多治見市でなければできない魅力を活かすべき。
- ・音楽やダンスなどの活動に取り組んでいる若者が市内にいることを認識できるよう、単発ではなく、定期的に活動できる活動・発表（イベント）の場、人の元気を活かせる場が必要ではないか。
- ・これまでは多治見駅を中心として発展してきたが、近年では郊外の大規模商業地を中心としてきており、コンパクトシティに逆行している。
- ・以前は都市圏の地価高騰に伴う住宅事情によって人口流入してきたが、都市圏の地価下落によって多治見市に住む必要がなくなってきた。また、団地よりも街中の方が不便という方も多い。最終的には市の魅力が少ないことにつながる。
- ・県内で二番目に出生率が低く、その傾向は今後も変わらないと推計される状況を打破する手法を考える必要があるのではないか。多治見を元気にさせるのであれば、市の核となる生産人口を呼び込む方がよいのではないか。そのためには他の市町村よりも魅力を高める必要がある。
- ・近隣他市と比較して子どもの通院医療費無料期間が短いことは家計への大打撃となり、母親が元気のない理由になっているのではないか。
- ・障がい児に対する支援は近隣他市と比較して最も手厚くなるように取り組まれており、その点は評価できる。
- ・教育の面では、すぐには効果が出ないかもしれないが、「脳活」により子どもの集中力を高め、自ら学ぶ姿勢を育てている。
- ・市内には、母親が朝食をつくれず、一日の栄養を給食で補っている子どももいる。教育現場の格差をなくすには、子どもの食を保障することが必要ではないか。
- ・虎溪山永保寺等、地理的歴史的にも個性があり、甘原のブルーベリー狩り農園なども多治見市の個性となっている事例といえるが、市民がそれらの個性を認識していないし、享受していないことが多い。市の魅力を観光客だけでなく、市民も楽しめるとよいのではないか。
- ・最近の父親は子育てに積極的であり、子どもの学校行事等にも出席することが多いように見受けられる。男女が同じレベルになってきているのではないか。
- ・近所付き合いが希薄になる等を原因としてか、母親が相談できる相手がいなくなっている。商店街の空き店舗等を、店舗としてだけでなく、母親が相談できる場にしてはどうか。
- ・空き店舗を活用し、母親同士が相談できる場をつなぎ役として提供している団体が市内にはある。年間で延べ数千人の利用があるが、子育て支援だけでなく、子どもも巻き込んだまちづくりとして取り組まれている。
- ・母親には子育ての中で「隙間時間」はあるものの、まとまった時間がなく、社会参加したいのにできないという欲求不満がある。
- ・大学進学や就職を理由に転出された方が「ふるさとに帰ってきたい」と思うのは、子どもの頃に

たくさん大人の大事にされた経験を持っているからだと思う。自分も多治見で子どもを育てたいと思えるようになるには、子どもの育つ環境が大事ではないか。

- ・東濃近辺で居住地を選択する場合、医療費負担を考えて近隣市町村に決める方もいる。隣接する地域でサービスに差があると、子どものいる家庭には支障が生じる。他市のサービスと比較して飛びぬける必要はないが、同程度のサービスは提供した方がよいのではないか。財政を理由として実施が難しいのであれば、子育てにおいて強みとなる点をアピールするべき。
- ・「元気」は「命」とあわせて考えられることが多い。多治見市では積極的に AED が設置されている。「AED によって命を救われた」等、多治見ならではの良い事例を PR してもよいのではないか。
- ・市内の NPO 等では、多治見のことを大好きな 60 歳以上の方が、自身の強みを活かして活動されている。寺子屋のような場を提供し、多治見の魅力を伝えていく、彼らの強みを伝えるといった機会を増やすことで、市民みんなが多治見を自慢できるように、そして「人財」になるとよい。
- ・子どもに多治見市の魅力を尋ねると「日本一暑い」、「うながっぱ」などが挙げられるが、全国でも類を見ない「焼き物文化のまち」を活かしたストーリーをつくれると更によいのではないか。
- ・多治見市内には環境関連の団体が多く存在する。各団体の代表は年に一度、環境フェアに参加するが、環境に関する取り組みをどのように市全体へ広げるかを考えることで、環境と共生のまちづくりにつながるのではないか。
- ・女性は子育てだけに専念するとストレスを溜め込むこととなる。喫茶店でお茶をたしなみながら共通の話題でゆとりをもった会合を開催するなど、身近なところで趣味をつくってもらうことで、女性、母親が元気なまちになるのではないか。
- ・うながっぱはやなせたかし氏がデザインしたという強みがあり、ゆるキャラとしての素質を持っている。最近市がイニシアティブをとり、民間と協力してうながっぱの関連グッズを開発していることもあり、市のイメージとして定着しつつある。今後も観光資源として活用し、市の収入増につなげていただきたい。
- ・多治見市は人口 10 万人以上の都市であるにもかかわらず、豊かな自然に囲まれている。その特徴を活かしてまちづくりを進めれば、市の歳入も増えるのではないか。
- ・根拠は不明だが、修道院のある町はもともと災害の少ない地に建てられているという話を聞いたことがある。いろいろな方の話を聞く中で、まちづくりに活用できる方法が見つかるかもしれない。
- ・近年は子どもも親も孤立しつつあるのではないか。特に親に対して、未就学時期のサポートはあっても就学後のサポートが充実していないと思う。高齢者では世代差がありすぎるため、子育てを卒業間近の年代の方による寺子屋のようなサポートがあるとよいのではないか。
- ・若者の活動の場として、市民文化祭の活用などはどうか。
- ・ボランティアの登録制度や買い物弱者支援など、市内で既に取り組みされていることでも市民に広く伝わっていないことが問題ではないか。良い情報を必要な人に届くように積極的に伝えるのが良い市の条件ではないか。
- ・行政に頼るだけでなく、活動に対する対価を自分で得るようにする仕組みが必要ではないか。

## 6 基本構想の検討（元気の要素について）

- ・計画においては継続性が重要である。
- ・前期計画において挙げられている元気の要素はすべてを網羅できているのではないか。
- ・イベントなどでは単発的な参加で終わってしまうことが多い。主体性を持ってかかわることが必要であり、それが「人づくり・支えあい」ではないか。
- ・「住み続けられるまち」に「安心して子どもを産める」という意味を含めた方がよい。
- ・人はどんなに年をとっても人の役に立ちたいと考える。また、自分も一員であるという実感で成長するものであり、子育てにおいてもサービスを受ける方がいずれはスタッフになる、という循環

- 環型子育て支援が望ましい。その点では「人財育成最優先」は大きな柱になるのではないかと。
- ・多治見市では「親育ち4・3・6・3たじみプラン」に取り組んでおり、生まれたときから「人財育成」しているといえるのではないかと。
  - ・「人財育成」においては教育が重要。また、育成した「人財」を行かせる場として、働ける場や潜在的に働く力のある方を「つなげる場」が必要ではないかと。
  - ・仕事、就業、育児等、母親を元気にするシステムが欠落している。
  - ・多治見の魅力を意識的につくる必要がある。
  - ・良さを互いに提供し、良いコミュニティを構築することが必要ではないかと。
  - ・まちのイメージを高めることで、多治見市が居住地として選ばれる可能性が高くなり、土地の価値も上がる等、良いサイクルを構築できるのではないかと。

## 7 今後の日程について

### 第2回委員会

期日：6/10(金)

時間：18:00～(2時間程度)

場所：市役所

※委員会終了後、懇親会を開催。

【別表】出席者名簿

	出欠	氏名	所属	備考
委員	○	牛田 拓造	株式会社共栄電気炉製作所	代表取締役
	○	大村 浩司	社団法人 多治見青年会議所	理事長
	○	小口 英二	多治見まちづくり株式会社	事業課長
	○	木下 貴子	多治見ききょう法律事務所	弁護士
	○	田尻 宣子	公募委員	
	○	中澤 香代	多治見市 PTA 連合会	母親委員長
	○	中津 道憲	中部大学 研究支援センター	教授
	○	野田 幸子	NPO 法人在宅支援グループ みんなの手	前代表
	○	原田 陽介	公募委員	
	○	平林 史孝	環境フェア実行委員会	委員長
	○	堀尾 憲慈	連合岐阜東濃地域協議会	議長
	○	牧野 民賀	NPO 法人まあーる	理事
	○	水野 隆吾	みずほ不動産鑑定事務所	不動産鑑定士
	市長	○	古川 雅典	多治見市長
事務局	○	青山 崇	企画部	部長
	○	吉村 健一	企画防災課	課長
	○	桜井 康久	企画防災課	リーダー
	○	岡安 秀明	企画防災課	
	○	加藤 泰治	企画防災課6次総グループ	リーダー
	○	横田 真己	企画防災課6次総グループ	
	○	皆元 健一	企画防災課6次総グループ	
	○	内山 祐介	企画防災課6次総グループ	
	○	松尾 彰久	企画防災課6次総グループ	
	○	富士 友紀乃	企画防災課6次総グループ	